

自ら学ぶ教職員 活動報告書

グループ名 東濃地区感覚統合研究会

テーマ 感覚統合の観点から児童生徒理解を深め、児童生徒の困り感に寄り添った指導支援方法を開発するとともに、互いの資質向上と普及活動に努めたい。

取組のポイント・成果

取組の内容とポイント

学校生活の中で、児童生徒の行動で問題とされるものには、授業中の離席、姿勢の乱れ、読み書きが苦手（板書を写せない等）、手先が不器用、情緒が不安定、乱暴等がある。こうした行動は、落ち着きがない子、だらしない子、不真面目な子、雑な子等と評価され、“困った子”と見なされてしまうことが多い。しかし、困った子と言われる児童生徒は、感覚統合の観点から見ると、うまく感覚の処理ができなかったり、感覚の過敏さや鈍麻さがあったりして、本人としては“困っている”ことが多い。例えば、授業中の離席や姿勢の乱れは、自分の体の傾きや椅子の接地面を感じながら、自分の体をバランス良く保つことへの困難さからくることも考えられる。他にも、友達を叩いてしまう子は、力加減が難しいのかもしれないと考えることができる。こうした感覚統合の観点から“困っている子”の実際を理解し、正しく導くために感覚統合理論を学び、教育（遊び）に取り入れる具体的な方法を考え、児童生徒が楽しみながら自分の苦手さや困り感を克服していける支援のあり方について考えた。また、資質向上に加え、講演会等を実施することで普及活動も行った。

◆感覚統合勉強会・事例検討会（場所：東濃特別支援学校）

月に1回程度集まり、感覚統合の知識を深める勉強会からスタートした。感覚統合の基礎となる参考書を購入し、各自勉強を進めるとともに、感覚統合の基礎知識のある構成員から初めて感覚統合を学ぶ構成員に対して、「感覚統合とは何か」について知識の確認をした。

＜感想から＞ 生徒の困った行動に感覚の過敏さや鈍感さ、調整の難しさが関係していることを知り、わざとじゃないんだと指導者が理解することで気持ちが楽になった。



構成員による感覚統合勉強会の様子

◆感覚統合研修会へ参加及び伝達講習（場所：静岡）

構成員で話し合うだけでなく、日本感覚統合学会が主催する研修会（基礎コース・体験コース）に参加し、具体的な“感覚を取り入れた遊びや支援の仕方”を学んだ。また、構成員へ伝達講習をすることで知識を深めた。

＜研修に参加して＞

・集中力が欠けると、貧乏ゆすりなどをして自分の覚醒を保持しようとしていることを知るなど、子供を理解するための自分の視野が広がった。

- ・様々な感覚がある中で、好きな感覚・苦手な感覚のどちらにも個人差があり、感じ方の違いを知ることが学びのスタートであった。
- ・感覚・運動・学習機能を伸ばすために、支援者のねらいを対象児童生徒の嗜好や遊びに結びつける工夫をすることで、主体的に取り組める仕掛けを作ることが大切だと学んだ。



構成員に対する伝達講習会の様子



日本感覚統合学会研修会の様子

◆作業療法士を招いての校内自主研修会及び、事例検討会

日時：12月27日（金）13：00～17：00

場所：東濃フロンティア高等学校

講師：東部地域療育センターばけっと 作業療法士 水科順子先生

講演：「子どもの発達と感覚統合～学校で活かすための基礎理論～」



作業療法士を招いての校内自主研修会の様子

日本感覚統合学会認定セラピストでもある水科順子先生による講演会を実施した。県内の特別支援学校や東濃地区を中心とした小中学校へも参加を募り、特別支援学校教諭を始め、小学校教諭（通級担当・特別支援学級担任）、中学校教諭、高等学校教諭、養護教諭、地域の発達支援コーチ、医療関係者からの申込があり、35名を超える参加があった。

講演会では、参加者からの質問をホワイトボードにまとめ、パネルディスカッションを実施した。研修会の中だけでは答えきれないほどのたくさんの質問が出たことから、先生方の日々の困り感が伝わってきた。参加者の満足度は、84%が“満足”、“やや満足”と答えた。その後、構成員だけでなく、参加者を増やしながら事例検討会を実施し、考察を進めた。アドバイザーの水科先生のお力も借りながら、すべての質問に答え、Q&A事例集としてまとめた。



事例検討の様子

<感想より>

- ・事例検討を通して、自分にはない見方、考え方を知ることができ、児童生徒理解が深まった。
- ・感覚統合の理論に基づき、自分なりに実践（子どもへのアプローチ）をすることができた。
- ・感覚統合の視点を知ることによって、生活全般が感覚統合の発達につながるということが分かった。なにか新しいことを始めなくても、我々教員が知識をもち、意識することで、どんな活動にも意味をもたせることができることを知った。今ある活動も取り組み方、言葉のかけ方などを変えるだけで（例えばラジオ体操や散歩でさえ）、感覚統合の発達を促し、子どもたちの困り感を軽減したり、改善したりできることを知った。

成果

- ・外部の研修会に参加し、情報を共有することで、感覚統合の見方、考え方を理解を深め、普段から意識して児童生徒と関わるようになった。
- ・感覚統合を理解するには、理論などが難しく、今後も知識を深める必要があるが、目に見える現象だけで子どもを理解しようとするのではなく、別の可能性も考えられるようになった。
- ・先生方の困り感を、共有→考察→還元することができた。また、“感覚統合”という観点を広めることで、児童生徒の困り感に寄り添える新しい視点（きっかけ）を作れた。
- ・校種を越えて研修をすることができたため、ネットワークの広がりを感じた。

反省・今後の課題

- ・感覚統合の理論の理解、共有が難しく、事例検討をするための基礎知識・理解を構築するまでに時間がかかったため、各自の実践を本研究会で検討するまで至らなかった。
- ・研究会当初、感覚統合の視点を取り入れたサーキット運動を考案することを目的としていたが、感覚統合のつまづきについては個別性が高く、一般化することの難しさを感じた。
- ・感覚統合は、幼児・小学校低学年までに取り入れることで最も効果を発揮するため、保護者・幼保・小学校職員を対象に情報を発信したいが、どう発信するかが今後の課題である。
- ・中学生・高校生へは、本人の困り感に寄り添い、生徒の自己理解を深められるように発信する必要があると感じている。

◆今後も事例検討会を定期的実施し、Q&A事例集を作成したい。（研修会参加者を中心に提供予定）

◆養護教諭部会で実践発表を実施した。今後も普及活動を継続したい。